税金が支える「復興」と「復幸」

金沢大学人間社会学城学校教育学類附属中学校３年　　向出　英ノ介

その日の雨は、「部屋の窓が割れてしまう！」そんな心配が募る強さだった。建物から外に出ようとしても、しっかり踏み込まないと雨の勢いで押し戻されてしまうほどの豪雨は、僕の故郷を被災地に変えた。

石川県加賀地方に激しい雨が降った、今年八月。僕が暮らす小松市は、降水量が観測史上最大を記録し、市内の住宅約一五〇〇棟が浸水。一級河川である「梯川」は半世紀ぶりに氾濫して地区が泥の海の様になった所もあり、警戒レベルが最も高い「緊急安全確保」が初めて発令された。中でも甚大な被害を受けた「中海町」は、小学生の時にバスケの練習で毎週のように通った思い入れのある町だ。

被災後、僕はボランティアに参加するため中海町を訪ねた。「梯川」と支流の「滓上川」が合流するこの町では、川から溢れた水が稲を倒し、田んぼの中にはあるはずのない車が浮いていた。安全に留意して川に近づくと、道路や堤防は崩れ、ガードレールは原型を留めておらず、濁流が水しぶきをあげながら倒木を飲み込んでいた。流れついた材木を運んでみると、水を含んだその重さに驚いた。中海町の町長は、記録的な大雨で、川の氾濫が起こりやすくなったことを危惧していた。上流から土砂や岩が運ばれ、川底が一メートルほど上がってしまったからだ。町長は、

「今後、少量の雨でも氾濫水位まで上がってしまう。九月は台風シーズンなので、早く川底をさらってもらいたい。」

と悲痛な思いを語っていた。

再建には。多くのお金がかかる。その費用はどう賄われるのかと考えた時に、「税金」が浮かんだ。東日本大震災では、防潮堤や住宅・道路などの整備に「復興予算」が充てられ、そのおよそ四割は所得税や住民税に上乗せされた「復興増税」だ。中海町はどう復旧を進めていくのか。市役所の道路河川課に電話をして聞いてみることにした。担当者は、今回、消費税や所得税などを活用する「災害復旧事業費」という予算を使うことを教えてくれた。川底にたまった土砂や岩を撤去する作業は緊急性が高いため、すでに重機や資材・人材が現場に投入されていた。地域の安心安全を一刻も早く取り戻そうと、税金が生かされているのだ。南加賀土木総合事務所によると、今後は川幅を広げたり、堤防を高くするなどの計画も立てられていると言う。

これまでは、税金が地域の役に立っているという実感があまり涌かなかった。しかし、たった一日で見慣れた風景が様変わりするほどの被害を受けた僕の地元を、税金が助けてくれることを学んだ。税金は、町を立て直す「復興」だけでなく、住民の心まで立て直す「復幸」のための大切な資金だ。小松市のインフラ整備に継続して取り組んでもらえるよう、また、自分の記憶も風化させないよう「税金」を支払うことで、被災者の「復幸」に寄り添える大人になりたい。